

科目区分：教科及び教科の指導法に関する科目（中学校）

授業科目名：ピアノ伴奏法（２）

対象年次：３年次～（６名受講）

ピアノ伴奏法（２）

音楽教育講座・安積京子

１．授業の目的と到達目標

本授業は、ピアノ演奏法を応用発展させ、教育現場や音楽実践の場において柔軟に対応できるピアノ伴奏能力を養うことを目的とする。また他者と音楽を共に奏でることによって、アンサンブルの楽しさや喜びを共有し、コミュニケーション能力を高めることを目的とする。

３年次の前期開講のピアノ伴奏法（１）において、すでに基礎的な知識および技術を習得している。本授業の後期の伴奏法（２）では、更に発展的な内容の課題を実施し、幅広い専門的知識と高度な演奏能力を身につける。

２．授業の概要について

本授業は、３・４回生を対象に開講されている。今期の受講生は、中等教育コースの３回生４名、４回生１名、初等教育コースの４回生１名である。ソロの演奏経験は多いが、伴奏やアンサンブルの経験はまだ少ないため、プロのソプラノ歌手をゲストに迎え、ドイツ歌曲の名曲を学生たちと共演させた。またプロのヴァイオリニストを招聘し弦楽器との初のアンサンブルを経験させた。受講生は他の学生がレッスンを受けている間、聴講し、お互いの演奏に対してコメントをする。

３．関連するディプロマポリシー

１）教育と教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している。（知識・理解）

２）教育活動に取り組むための十分な技能を身につけている。（技能）

４．授業の課題について

以下に受講生が選択した課題の一部を記す。

（歌曲伴奏による課題曲）

○シューベルト作曲：野ばら D257、楽に寄せて D547、鱒 D550

○シューマン作曲：歌曲集『ミルテの花』op.25

より第１曲「献呈」、第３曲「くるみの木」
第７曲「蓮の花」

（ヴァイリン伴奏における課題曲）

○クライスラー作曲：愛の悲しみ、美しきロス
スマリン、シチリアーノとリゴードン

○ラフ作曲：カヴァティエーナ

○エルガー作曲：愛の挨拶

（連弾および２台ピアノにおける課題曲）

○モーツァルト作曲：２台のピアノのための
ソナタ KV448 第１楽章

○ラヴェル作曲：組曲「マ・メール・ロワ」

○ドビュッシー作曲：小組曲 1.小舟にて

５．指導上のポイント

１）課題曲選曲に関して

講義中に楽譜を見ながら音源を聞き、各自取り組みたい曲目を検討した。課題曲決定の際には個々の学生の音楽的嗜好や習熟度に応じてアドバイスをを行った。

２）ピアノ伴奏法の具体的な指導に関して

○楽曲のデュナーミク、テンポ、表情記号など楽譜に示された音楽情報を正確に読み取り、作曲者の意図を忠実に表現するよう指導した。

○運指はピアノ奏法の基礎となるものであるが、弾きやすさより、音楽表現に適した指使いを選択できるよう細心の注意を払った。

○歌声に調和する濁りのないピアノの響きを得るために、和声に応じてペダルを踏む箇所を楽譜上に丁寧に記した。

○フレーズを大切にし、歌声の自然な流れに沿って、ピアノ伴奏のテンポ・ルバートの加減を吟味させた。

○弦楽器の発音原理を理解させ、ヴァイオリンに適したピアノの音色について考察させた。

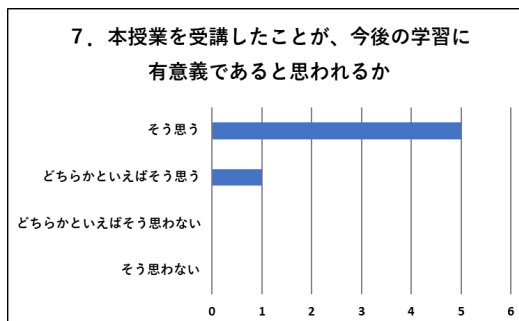
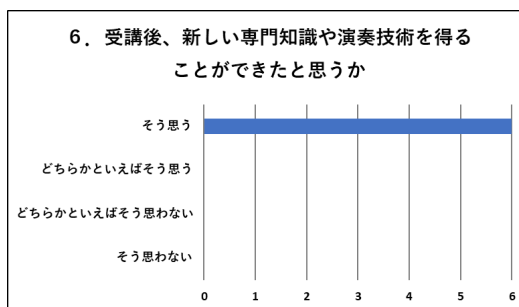
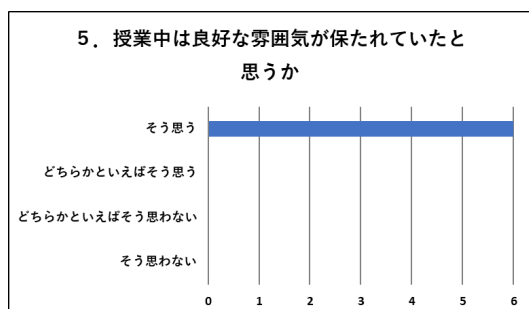
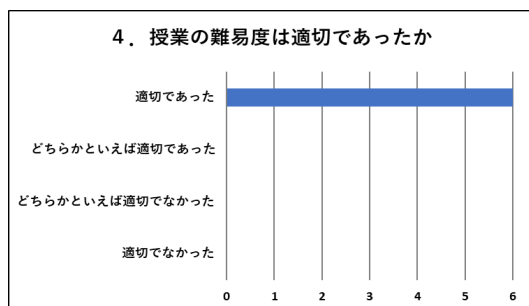
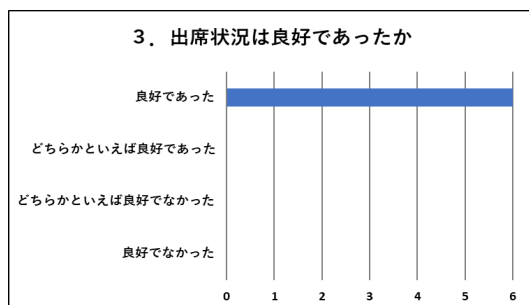
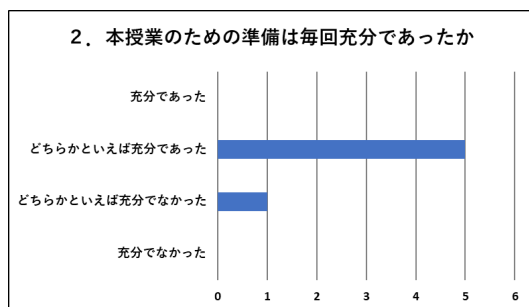
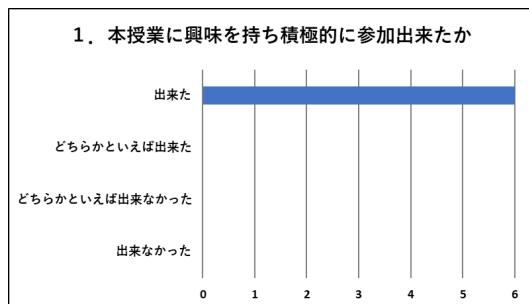
○舞台での共演者とのコンタクトの取り方、体の使い方、音楽的な呼吸の仕方を指導した。

○最終回には「連弾および２台ピアノによる発表会」を企画し、受講生は音楽教育講座の学生を対象に練習の成果を披露した。

6. 授業アンケート

本授業終了時に、受講者6名を対象に無記名方式で、下記の7項目の4段階評価によるアンケートを実施した。また自由記述も併用した。

1) 集計結果について



8. 本授業で良かった点 (自由記述より抜粋)
 ○プロの演奏家(声楽家、ヴァイオリニスト)と共演するという貴重な経験ができた。
 ○歌や弦の伴奏、2台ピアノ等それぞれの違いや特徴を理解し楽しみながら演奏できた。
 ○専門的な指導を受け、他の人のレッスンも聴くことで多くの曲が学べた。

9. 本授業で改善すべき点 (自由記述より抜粋)
 ○課題曲を早い段階で決めておけると余裕を持って取り組めると思う。
 ○連弾・2台ピアノの発表会までにもう少しレッスンと練習期間がほしかった。
 ○プロの方と共演してうまくできなかつたところを改善してもう一度合わせる機会があると嬉しかった。

2) アンケート結果のまとめ

授業外学習時間は週平均6.5時間であった。ばらつきがあり、14時間練習する学生と3時間する学生がいた。授業準備に関しては、どちらかといえば充分であったと回答する学生が多かった。授業課題の難易度はほぼ適切であり、全員が受講後、新しい専門知識や演奏技術を得ることができたと回答している。

7. まとめ

受講生全員がプロの演奏家との共演が非常に良い経験になったと記述しており、ゲストティーチャーを招いての講義を継続して行いたいと考えている。今後は個々の受講生の

習熟度に応じて適切な指導を行うと同時に、本アンケートの改善すべき点で指摘された課題曲の決定時期について検討し、受講生が余裕を持って取り組めるように早い段階で提示できるようにしたい。

8. 授業風景



(ゲストティーチャーの菊本恭子氏と受講生)